瘤嚢内に於ける小兒手拳大の白色血栓形成、該動脈瘤の壓迫による左肺下葉の壓迫性無氣肺及び動脈瘤壁との癒着

2) 軟腦膜下出血

大脳穹窿面中等度の鬱血，腦溝部に於ける多發性瀘出性出血，特に左前頭及び頭頂領域並びにジルヴイ溝等の軟腦膜に於ける稍々廣汎性の新鮮な瀘出性出血。

3) 心臓兩心室輕度の擴張，心筋の溷濁及び弛緩，僧帽瓣乳嘴筋に於ける心内膜下出血。

4) 肺臓軽度の鬱血，水腫及び竈狀気管枝肺炎

5) 肝臟間質炎，粟粒護膜腫

肝臓の溷濁，腫張，脂肪沈着，竈狀鬱血。

6) 脾臓の斑状強度の鬱血及び出血

7) 多發性間質性亞急性並びに慢性腎臓炎
右腎著明な赤褐色顆粒状萎縮，左腎廣汎性竈
状萎縮。

8) 廻腸下部に於ける強度のポリポーズ。

9) 兩側纖維性癒着性子宮附屬器炎。

10) 甲状腺左葉に於ける小豆大腺腫結節。

む す び

要之 本例は梅毒性大動脈中膜炎に基く胸部下行大動脈瘤の存在する事から梅毒を持つていた事は事實であるが、軟腦膜に於ける廣汎性瀰出性出血は大動脈瘤内血栓、或は腦動脈の梅毒性變化に由來した腦動脈栓塞に基くものであるか、又は之とは關係なく、例えば CO の中毒の様なものために偶々軟腦膜出血を起したものであるか否かは前記所見のみでは、今直ちに斷ずる事は困難である。然し本出血のため臨床上癲癇頻發狀態を招き死に至らせたものと考えられる。

稿を終るに當り終始御懇篤な御指導及び御校
閤を賜はつた恩師赤木教授に感謝し、種々御教
示を頂いた堀口醫學士並びに御協力を頂いた醫
局員の方々に謝意を表す。

グアノフラシン點眼後眼瞼・睫毛並びに遠隔皮膚に自變を起した一例

A Case of Albescence Alteration (=Depigmentation) Occurred in Eye-lid, Eyelashes and Far Parts of Cutis by Use of Guanofuracin for Eye-wash

日本醫科大學解剖學教室

醫學士 牛 山 喜 美 人

Ushiyama, Kimito

(本症例は昭和 27 年 2 月第 315 回皮膚科學會東京地方會に於て報告した)

1. 緒言

グアノフラシン點眼による睫毛・眼瞼の白變症については諸家の報告があるが、遠隔皮膚面にも白變を起した報告は少なく、僅かに北村氏の報告があるのみである。最近私はグアノフラシン點眼後睫毛眼瞼のみならず遠隔の皮膚面にも白變を生じた1例を経験したので取あえず報告する。

2. 症 例

患者 ■■■ 男 32歳 會社員

初診 昭和 27 年 1 月 4 日

家族歴 特記すべきものはない

既往症 梅毒を否定している

現病歴 昭和 25 年 9 月頃急性結膜炎に罹患し某眼科醫院に於て洗眼 1 週 2 回點眼 1 日數回の治療を受け 1 カ月で症状輕快、治療を中止し

た。その後2カ月して睫毛・眼瞼が白變してきた。更に8カ月経過して昭和26年8月頃何等の自覺症状なしに、胸部・上腹部に白斑のあるのに気がついた。更に注意していると3カ月経過した同年12月陰部にも白斑を生じてきた。

現症 睫毛：上下眼瞼の睫毛は全部白變している。

眼瞼：眼瞼は上下とも眼裂にそい幅0.5㎝ないし1.5㎝の白斑がある。

胸部：上胸部に形状不規則な凡そ小指頭大の白斑がある。

腹部：上腹部に形状不規則な胡桃大の白斑がある。

陰部：右側に偏し手掌大の白斑があり、皮膚白斑部に該当する陰毛は散發的に白變している。

各部位いすれも健康皮膚との境界は明瞭ではあるが、著明な色素集積は認められない。また知覺麻痺も認められない。

3. 考 按

本症の發生は昭和23年グアノフラシンが發見されて各科に用いられ、眼科では昭和25年1月以來使用され、同年6月15日に初發例が發見されている。それ以來眼科皮膚科に於て甚だ興味ある問題として本疾患がとり上げられてきている。

本症の報告例を綜合すると、その發生狀況は性・年齢に關係なく、既往症に結膜炎・トラコーマがあつたものが全部である。發生部位は睫毛・眼瞼に限局して白變を生じたものが大部分で、他の遠隔皮膚に白斑を生じたものは北村氏の鼻翼根部の1例が報告されているだけである。

原因については神經説（北村）、アレルギー説（田地野・小原）、メラニン新陳代謝の變化によるもの（高野）、光力學的作用による色素の萎縮に原因を求めるもの（陶山）等があるが未だ定説はない。しかし遠隔皮膚にも白斑を生じるという事実は以上の諸説について一應再検討の要を思わしめる。高野氏の報告によると使用例300人中觀察者129人で白變を生じたもの29例（22%）となつており、本症發生には個人的差異があり素質が關係するものとも思われる。治療については今のところ方法がない。

4. 結 語

本症はグアノフラシン點眼後睫毛・眼瞼及び遠隔皮膚面にも白變を生じた1例であつて、睫毛眼瞼には3カ月後に、胸部腹部には約1カ年後に、陰部には約1年4カ月後にそれぞれ白變を生じてきたものである。

グアノフラシン點眼により睫毛・眼瞼に白變を生じた症例を更に時間的経過を逐つて觀察するならば、本例の如き興味ある症例が更に多く發見され、本症發生原因の解明に資するところが大ではないかと思う。

終に臨み御校閱を賜つた丸山千里教授に深甚の謝意を表する。

文 献

- 1) 十全醫學會雜誌 51 卷 273 .
- 2) 高野 日眼 55 卷 6 號 399-403.
- 3) 高野他 眼臨 45 卷 3 號 170. 昭 26
- 4) 鈴木 〃 45 卷 3 號 188. 昭 26
- 5) 陶山 眼臨 45 卷 5 號 272-274. 昭 26
- 6) 田地野 治療 33 卷 9 號 昭 26
- 7) 樋口 臨床ト研究 28 卷 12 號 昭 26
- 8) 北村 日醫新報 1446 號 昭 27
- 9) 北村 日醫雜誌 27 卷 1. 2 號 昭 27